



井田 安雄

むかし、むかし、あったとき。

ある所に三人の娘を持ったおじいさんがいたとき。

そこで、「天気がいいから、これから（畑へ）草むしりに行ってくる」っちゅうで、おじいさんが出掛けて行って、草むしりしていたら、あんまり天気がいいし、こええ（大儀だ）もんだから、じいさん、「ああ、この草むしってくれれば、娘が三人いるから嫁にくれる」と言ったとき。そしたら猿が聞きつけて、

「じいさん、じいさん、今何言った」

「いやあ、何も言わねえさ」

「いやあ、何か言ったようだった」

「いやあ、あんまりこええから、この草むしってくれれば、娘が三人あるから、一人嫁にくれるのがうちゅうで、独り言言ったよ」

「へえそうかい。じゃあ、おれが草むしってやるから娘くれてくれ」

って。そこで早速草むしってしまっ、

「さあ、こいで草むしってしまったから、まあ明日ちゅうわけにはいかねえから、あさって迎えに行くから、娘をくれてくれ」

って言う。じいさん、そういわれて家へ帰って来たども、さあ、猿とそういう約束してきたから困った。

「おじいさん、おじいさん、何か食べねえかい」

って娘がいったら、

「いやあ、何も食べたくなえ」って、そこで寝て、朝げになって、

「朝飯だから起きて食べねえかい」っていったら、

「いやあ、食べたくなえ」っちゅう。

「そいじゃあ、どこか悪いかい」ったら、

「いやあ、悪かねえさ」

「じゃあ、何か心配事でもあるかい」ったら、

「そう、まあ、とんでもねえ約束してしまった」

「何約束したんだい」

「いやあ、あんまり草むしりがこええから、『この草むしってくれれば、娘が三人あるから嫁にくれるがなあ』っていったら、猿が来て、草むしってくれて、そいで嫁にくれるっちゅう約束したな」



「まあ、そりゃあとんでもねえ約束したもんだ」

そいで、姉娘に、「どうだ嫁に行ってくれねえかい」ったら、「ああ恐ろしいこった」って。まん中の娘に、「どうだい、お前は」たら、いやだという。そいで末の娘に話したら「いやあ、仕方ねえ、親のいうことだから聞くべえ」「そいじゃ、明日の朝にも猿どんが迎えに来るちゅうから、いくらか嫁入り仕度しなきゃあなんねえ」たら、「いやあ、何にも仕度なんぞいらねえ。猿のどこへ行くんだから、空き俵とちようばしと、それだけあればたください」っちゅう。

そいでまあ、空俵もらって、それを着たかはいただきして、ちょうばし被って、猿どんの来るのを待っていたら、ほしたら、猿どんが、「キッ、キッ」と喜んで来て、「さあ嫁さんをもらいに来たからくってください」っちゅう。そいでまあ、「仕度が出来たから行くよ」っちゅう。ほいで、末娘が猿にかたっていぐ。残ったてえは、「ああ、どうせ、猿のどこなんだ行けば、生きちゃ帰れねえだっぺが」っちゅうで、泣いてたとき。そうして、猿どんと娘と連れだって行って、山へ行って、二人で暮してたとき。

「ああ、節句になるから、これからおじいにお土産に餅搗いて持って行くべえか」って。

「そうだね。餅搗いて行くことにすべえ」って。ほいで、草餅を搗いて、「何に入れて行ったらよかつべえなあ。重箱に入れてつか」と猿どんがいったら、「いやあ、おらがおじいは、重箱なんぞ入れたら、重箱くせちゅうって食わねえやい」「そんじゃあ、鍋入れてつかい」ったら、「いや、鍋に入れてけば、鍋くせえちゅうって食わねえやい」って。「そいじゃ、どうすればいいんだい」って。「いやあ、猿どんは力があるから、臼へ入れたまんま背負って下さい」「ああ、それもそうだな」

そいで、餅のへえった臼背負って行ったところが、ええかん行ったら、まあ、川端にいい桜の木があって、桜の花がきれいに咲いていたと。そいで娘が、

「ああ、この桜の花をお土産におじいにとってくってえもんだなあ」

「ああ、そんなこたあ造作ねえ。木に登ってすぐ取ってくべえ。そいじゃあ臼どこに置いたらよかつべえ。土の上におろすか」

「いや、土の上におろせば、土つくせえちゅうで食わねえやい」

「そいじゃ、草の上におろすかい」

「いやあ、草の上におろせば、草くせえって食わねえやい」

「じゃ、まあ、臼背負って登ることにすべえ」

そいで、臼背負って登って、いいかんべ高えとこまで登ったで、

「ほら娘これかい」ったら、

「いま一枝上」

「これかい」たら、

「いま一枝上」。

そいで最後のでっぺんに行って、

「これかい」たら、

「いま一枝上」たら、ポキーンと枝が折れて、川の中へ

臼背負った猿が落ちたとき。ほいで、

「猿は下になれ、臼は上になれ」っちゅうで、その娘は言いしな逃げて、家へ帰ったとき。そうしたら、家の人たちは喜んで、みんなしてお祝いしたとき。

それっきり。



## あとがき

話者 利根郡みなかみ町藤原 雲越けささん（明治35年生まれ）

雲越けささんにお聞きした「猿むこ」の話を紹介させていただく。この話は県下に広く分布していて、よく知られている昔話である。

「猿むこ」の話の中には、「嫁入り型」「里帰り型」「火焚き娘型」の三つの型があるというが、この話は「里帰り型」に属する。県下に一般的に分布している。

けささんの「猿むこ」は、語り口が独特で、土地の言葉をそのまま使ったの語りで、ゆったりした印象を与えている。本稿では話が長いので、行替えを少なくしたので、読みにくくなってしまった。話の展開がスムーズでなく残念である。けささんには申し訳ない。（けささんのプロフィールは2001年9月号をご参照ください。）